

我 国 に お け る

「養護児童の声」運動の可能性

——全国養護施設高校生交流会の展開とその意義——

津 崎 哲 雄

「先生も一度は施設で生活したらよい。ただし保母さんの指導の下でだよ」⁽¹⁾

「庇護者ぶって『我々は君らに最善のことをちゃんと知っている』という態度をとることは、法律に反することになる。」⁽²⁾

「1 締約国は、自己の見解をまとめる力のある子どもに対して、その子どもに影響を与えるすべての事柄について自由に自己の見解を表明する権利を保障する。その際、子どもの見解が、その年齢および成熟に従い、正当に重視される。2 この目的のため、子どもは、とくに、国内法の手続規則と一致する方法で、自己に影響を与えるいかなる司法的および行政的手続においても、直接的にまたは代理人若しくは適当な団体を通じて聴聞される機会を与えられる。」⁽³⁾

は じ め に

英国においては、「養護児童の声」運動を端緒として、児童養護改革の気運が高まり、各種の養護児童権利擁護制度が生み出されつつあることを、他所（「英国における児童養護改革の視座」佛教大学研究紀要第74号、1990年）で論じた。こうした改革の起爆剤となった運動についても、10年ほど前から『養護児童の声』⁽⁴⁾（NCB）や『続・養護児童の声』⁽⁵⁾（NAYPIC）の翻訳等を通じて紹介してきた。⁽⁶⁾しかし、我国においては関係者からの反応は鈍く、この種のアプローチが児童養護施策・実践の改善努力として試みられるほどには我々の意

識が成熟していないと痛感させられてきた。ところが、1988年の夏から、一部の養護施設関係者の努力によって、「全国養護施設高校生交流会」と呼ばれる活動が開始された。この交流会においては、養護施設で生活している高校（あるいは専門学校・専修学校）生が全国各地からある場所に集い、数日間起居を共にしつつ、レクリエーション・日帰り旅行等を含む交流プログラムを体験しつつ、同じ境遇にある者同士が自らの生活について語り合うことを通じて、施設での生活に付随する問題を明確にし、解決策を共に模索する試みがなされるのである。そのような作業を中核とした数日間の共同生活体験を通じて、施設で生活する高校生としての自覚を促し、自らの主体性を確立する刺激を提供するのである。

こうした試みは英国の「養護児童の声」活動に非常に類似している。しかし、1988年に開始された当時、交流会を企画運営した関係者は英国の活動について知らなかったようであり、実際この交流会は英国のそれとは全く無関係に開始されたのである。筆者は一昨年の第1回鳥取大会報告書に接して以来、関係者から直接この交流会開始の背景や動機をうかがいながら、英国の活動との比較を通じて、この種の試みの特徴と可能性を論理化することに関心を抱いてきた。幸いなことに、1990年8月8～11日に京都府舞鶴市で開催された第3回大会に参加する機会が与えられ、この交流会の組織・手順・雰囲気・活動の実際をつぶさに体験することが出来た。この経験から学んだこと並びに前2回の報告書の分析を通じて、この交流会と英国の活動との相違を探り、この高校生交流会が英国のそれに匹敵する実質ある「養護児童の声」運動として、戦後45年間続いてきた現在の我国の児童養護体制を改善する幾許かのインパクトとなりうるかどうか、その可能性を検討することが、本研究の目的である。（本研究は1990年度佛教大学学会特別研究助成—個人—による研究成果公表の一部である。）

1. 全国養護施設高校生交流会第1, 2, 3回大会の概要

養護施設高校生の交流会という発想の起源は、背景として養護施設において

直面せざるをえない高齢児（高校生を中心とする）処遇への取り組みが存在していたことは確かだが、基本的には、3回の大会の中核的役割を担った養護施設関係者の児童養護理念に在ったといえる。交流会運動の中心人物である北海道美深育成園長、木下茂幸氏は、交流会開催の意義について次のように説明している。

「……これは高校生の交流会であって研修会ではない。すなわち養護施設で生活する高校生の交流の機会をもち、施設生活・学校生活・社会的自立に向かったの問題等を語り合い、共に悩み、共に目指すものとして、共感し連帯感を培うためのものであった。また初めての小さな交流の輪が、回を重ねることによって大きな輪となり、養護施設の高校生会議として、自らの問題を考え、社会的に発言し、自己の現実に建設的にアプローチすることを期待するものである。参加の高校生は十分な手応えを感じさせてくれた。またもう一つには、現在の養護施設がかかえている『高年齢児処遇』の問題に、直接的にアプローチする意味もあった。もっとも、高年齢児処遇といってもその捉え方が問題であるが、我々の意図は、高校生をいかに教育指導するのではなく、まずその前提として、高校生に相応しい社会的地位（ポジション）を与えること、それに相応しい権限（自己決定）と責任（社会的自覚）をもたせるかということである。換言すると、施設生活に主体的に参加させることを意味し、主体者としての地位を与えることである。ともすると施設生活では、教育的配慮・集団の秩序が先行して、管理的・操作的な生活が当然のこのように強いられがちである。いうなれば『おしきせ』の生活がまかり通っている。高校生交流会開催の意図は、そのような施設の在り方に視点をあて^めることであつた。」

木下氏は、また、養護施設高校生交流会が必要な理由を第1回交流会鳥取大会報告書において、次のような3つの状況認識に依拠して説明している。イ、社会的状況認識：社会的自立のために高校教育を保障することに伴い、高校生の活性化こそが施設生活の活性化に相乗的作用を及ぼす、ロ、施設生活の状況認識：施設の人的・物的環境が高齢児の養育態勢にないが、その改善には高校生自身の貢献が必要である、ハ、高校生（思春期中期）の発達課題：高校生は同一性（主体性）確立期にある。このような諸問題・課題に「高校生自身が積

極的に取り組むことを期待し……自己の現実を直視すること、自己の問題を公式に発言することを通して、社会的人間としての成長を期待した」のであると、木下氏は述べている。同氏はさらに、「第1回大会があくまでも養護施設の高校生を理解する視点からのアプローチであった」のに対し、第2回美深大会は「施設の高校生処遇の実態と、問題の所在に対するアプローチの必要性を痛感してのことであった」と述べ、高校生を大人の眼でとらえることの問題性、施設職員と児童の信頼関係構築、児童の境遇への共感、「立場の優位性」に胡座をかく問題性、施設生活の主体者は子供であるという認識の徹底などを指摘し、「子供達は施設のためにあるのではなく、施設が子供達のためにあるということに徹することが今求められている」と交流会開催の背景を説明している⁽⁹⁾。木下氏は、従来から以上に述べたような理念を自らの施設で「高校生部会」活動という方式で実践してきており、高校生交流会という発想は、この高校生部会活動の一側面を全国規模で展開する試みであるといえるかもしれない（この高校生部会については、註(13)を参照せよ）。

1988年の第1回鳥取大会の主催者は養育研究所・鳥取養育研究会、翌年の第2回北海道美深大会の主催者は全国養護施設高校生会議準備会となっており、いずれも交流会を実施するためのアド・ホックな任意組織であった。このことは、これら二つの交流会が主として中核的な役割を担った数人の施設関係者（特に木下氏、鳥取こども園副園長、藤野興一氏、青少年福祉センター新宿寮寮長、市川太郎氏等）による私的な努力であったことを示している⁽¹⁰⁾。したがって、第1回大会は、参加者も8都道府県11施設の高校生24名、アシスタント14名という小規模な交流会であった。参加者がそれぞれ20都道府県38施設の74名と24名に増大したとはいえ、第2回美深大会も依然として規模の小さな交流会であった。両方の会とも、ある養護施設を拠点として、近辺の公的宿泊施設・社会教育施設を利用して、3泊4日、4泊5日で行われた。これに対して、第3回京都大会は、全国養護施設の協議組織である全国養護施設協議会が主催者となり、公的な性格をもつ活動となった。全養協によるこの交流会の主催は、1989年における全養協高松大会において決定され、第3回大会の開催準備には、京都の養護施設があたることとなった。しかし、後述するように、この全

養協主催は交流会に市民権を与える程の意味を持つ画期的な出来事であったにも拘らず、必ずしも全養協を構成する施設長が全員一致して支援するものとはなっていない。とはいえ、第3回京都大会には、全養協主催の影響か、前2回からの自然的発展かは判らぬが、参加者は26都道府県（約6割）63施設（12%）から集った154名の高校生と43名のアシスタントへと倍増した。

全国養護施設高校生交流会のプログラムの3回の大会を通じて共通している。3泊4日ないし4泊5日の日程に、高校生の小集団（5～8名）を大人のアシスタントが支えて話し合いを行う分散会を中心に置き、全体会で話し合いを総括するのが主要な流れである。それに、参加者の人間関係を促す導入やレクリエーションとして、交歓会・講話（高校生の自立について）・海岸散策・海水浴・鳥取市内観光・キャンプファイヤー（以上第1回）、自己紹介・公園散策・礼文島宗谷岬観光・野外ジギスカン・キャンプファイヤー（以上第2回）、海水浴・釣り・地曳網体験——海が荒れて実施出来なかったが——・天の橋立観光・キャンプファイヤー・京都市内観光（以上第3回）が組み込まれている。交流会の中核をなす分散会・全体会は、第1回は延べ8時間、第2回は延べ9時間15分、第3回は延べ8時間半、時間をとって実施された。

分散会での話し合いは、主として参加した指導員・保母等が原則として2人1組（1人の場合もある）でアシスタントとなって、以下のような予め定められた要領で進める。例えば、筆者が参加し、実際に担当した第3回大会の「アシスタント心得」では、アシスタントは、司会及び書記をつとめ、司会に際しては討議の手順はさておき、討議内容に対して操作的に関わらぬこと、ノンダイレクティブ・カウンセリングの要領で行い、進行については操作してもよい、と役割が規定されている。そして、4回に亘る分散会のテーマもそれぞれ導入、施設生活、社会的自立、まとめと一応枠付けられている。この分散会におけるアシスタントの役割が非常に重大であることは、容易に想像できよう。彼等の交流会に対する準備・知識・理解および対人関係技能によって、分散会における話し合いの内容や方向、それに充実度が全く違ってくるのである。次章では、実際に筆者が担当した第14班における分散会の様子を報告する。

2. 第3回大会第14班における分散会の実際

第14班を構成するのは、三重、奈良、兵庫、北海道、東京（2名）の施設で生活する高校3年女子6名とアシスタント1名（筆者）であり、彼女らの施設入所年数は7年、11年、17年、15年、8年、2年である。そのうち1名は昨年の交流会経験者であった。4回の分散会は延べ7時間半にわたって行われた。各回のテーマが導入、施設生活、社会的自立、まとめと定められており、「アシスタント心得」に則り概ね実施した。交流会の意味が飲み込めぬまま意見をいう者、気軽に発言するが直ぐに脇道に逸れてしまう者、口数は少ないが的確に発言する者等、参加の動機も理解度も多種多様であるので、一方で話し合いの内容を記録しながら、他方で話し合いの舵取りをせねばならぬアシスタントの役割は、想像よりは遙かに難しく、熟練を要するものであった。第14班の分散会に割り当てられて部屋は、彼女らが宿泊している民宿の2階の1室（約10畳）であり、窓と押し入れがあり隣室との境および入り口は狭い。中央につきなみの座卓がおかれ、それを中心として囲むように（後には壁に寄掛かって）座り、話し合いを行った。分散会毎に茶菓子が用意されたが、そのことと話し合いの進み具合は、特別には関係していないようであった。話し合いの最中にビデオ記録班が入室し、話し合いの様子を記録するので協力してほしいと本部から依頼があったが、構わないかどうか彼女らに尋ねたら、2名を除いて反対したので、遠慮してもらうことにした。勿論、ビデオ編集に際しては音声を入れ替え、発言者が特定出来ぬように配慮するということを説明した上での決定である。また、交流会の視察・激励に訪れた厚生省児童福祉専門官が話し合いの様子を見たいので臨席してよいかと打診してきたので、彼女らに諮った。反対は少数派であったが、彼女らの気持ちを尊重した方がよいという判断から、これもまた遠慮してもらうことになった。以下は4回にわたる分散会の概要である。

第1分散会（1990年8月8日19：00～20：30）

事務的な伝達・確認事項（健康状態、貴重品預り、帰途予定の確認、切符の

有無等)を別にして、3つのことを行った。最初に、この交流会の意味を彼女等に解説した。第1、2回の交流会、英国のこの種の会合のことをひいて、高校生が施設生活を良くする中核となるためにここに集まっていることを話した。経験者1名と他の2名は主旨を概ね理解できたようであったが、残りの3名については判断できない。次は、自己紹介であり、在所施設名、所属クラブ(高校・施設)、特定の男友達の有無等を話してもらった。特定の男友達がいるものが多かったが、彼女らの関心は「彼が施設の子か外の子か」という問題に集中していた。筆者も、交流会への関心を中心に自己紹介を行った。緊張を和らげるために、彼女らの施設のうち若干の知識のあるものについてはそれを披露し対話を進める中で、意外な事実が浮かび上がり、一同が驚くようなこともあったりした。最後は、この会への参加要因に関する確認である。この会を彼女らに紹介したのが施設長であった者3名、指導員であった者3名、参加を決定したのが施設長であった者5名、指導員であった者1名であった。この交流会については、「参加して帰ってきたら力がつく」、「どんな施設があるか聴かれる機会」、「いろんな施設があるので勉強できて力をつけられる」、「施設を良くするための話し合いができる」、「学園がよくなるための話し合いがある」(前に参加した先輩の説明)、「自分達の生活をより良いものにする会合」という風に説明されていた。この会へは、半数が不安を抱いて、半数が楽しみを期待して参加した。昨年の経験者は、今年の交流会が昨年のとどの様に違ったものとなるか、期待していると語った。

第2分散会(8月9日9:00~11:30)

「アシスタントの心得」によると、この分散会は施設生活に関すること一不自由・不合理と思われること・プライバシーの問題:施設生活の負因およびプラス面:施設生活に対する提言(これは特に重要である)を話し合うことになっている。しかも、余りにも個人的な見解は聞き流し、共通の問題を論じさせること、司会者は話題を抽象して問いかけること、討議が低調な場合には、司会者の問題意識を具体的事実置き換えて提示し、具体——抽象——具体を繰り返す、討議を深めること、がアシスタントの留意事項とされている。こう

した留意事項を筆者が遵守できたとは到底思えないが、参加メンバーは活発に話し合い、自分の意見をいい、問題の所在を訴えようとしていた。発言順ではないが、施設生活についてのメンバーの意見を問題別に列挙する。

(1) 職員の問題

- ・肉親の悪口を言われるのがたまらない。
- ・高校進学をたてに子供を支配する（正座させて進学を乞い願わせる）。
- ・職員の都合で職員のやるべきことを子供にやらせる（炊事、掃除等）。
- ・記録の記入を大義名分として仕事をサボる。
- ・ホームの備品など自分の好みで購入する。
- ・冷蔵庫にある子供のためのものでも自宅にもって帰る。
- ・口論するといつも「そんなら親許に帰ったらいいでしょう」という。
- ・在宅で不幸な生活を送っている子供よりもあなたたちは幸せだと思わないさいといわれると何もいえない。
- ・保母は若くて話が合うようであるが信頼できない、裏表がある。
- ・若い指導員は頼りにならない、夜外に出掛けて遊ぶ。
- ・子供の帰省日程を職員の都合で決める（初対面の親許に何泊もさせられる）。
- ・何のために保母は雇われているのかわからない。
- ・職員は子供のことをよくわかっているのに、子供も職員の仕事を理解してほしいといつもいうが、嘘ばかりでちっとも子供のことがわかっていない。

(2) 日常生活の諸問題

- ・宗教行事へ強制的に参加させられるのは抵抗がある（しかし、馴れているので嫌だと感じないという意見もある）。
- ・炊事、洗濯、掃除等、強制されるのは嫌だ（自分のものについては納得しているが、日曜毎に他の子供の分まで強制されたり、職員が当然すべきことを押し付けられるのはおかしい）。
- ・門限が厳しく外出ができない（規定は各施設多様であり、月2回日曜日の午後1～3時—高校生は朝から5時までというところや、保母・園長

に許可をもらって誰かの同伴が条件で外出できるところ、一応夕食の6時が門限であるが、職員に言えば8時、催しが在れば11時までと柔軟になっているところもある)。

- ・施設で生活しているから、時間の規制が厳しく、高校の友人に遊びに誘ってもらえないし、誘ってもらっても断らねばならない(一緒にどこかにいっても必ず途中で自分だけ先に帰らねばならないので、何回も断ると誘ってくれなくなるし、途中で帰ることが度重なると声をかけてもらえなくなる)。
- ・現金を自分でもてない。
- ・買物に職員がついてくる、細かい物でも買ったものを見せなければならない。
- ・高校のクラブ活動に入れない(施設内に2、3あるが興味がない)。
- ・アルバイトが禁止されているのはおかしい、高校では許可されているのに(アルバイトも、長期休暇のみ可のところ、施設内でアルバイトらしきことをさせるところ、高校3年のみ可のところ、給与を退所まで強制的に積み立てさせるところ、接客業種は禁止して対物単純労働しか認めぬところ、と各施設まちまちである)。
- ・小遣いの管理を自分でやりたい(ちなみに、その月額は3000円、5100円—衣服費5000円は別途支給—、5300円—日常品費含む—、3500円、6000円、3500円)。
- ・手紙を勝手に開封しないでほしい(親が現金を入れてきたことがあって、それ以降関係ないものまで開封する)。
- ・男の子から電話がかかると相手の素性をしつこく尋ねられる。
- ・ロッカーや机の中を勝手にさぐらないでほしい(喫煙や万引きの調査かもしれないが、とても嫌な気がする)。
- ・高校生らしい居室がほしい(特定の子供—進学準備中—には個室のあるところもあるが、4人部屋、18人部屋、12人部屋、6人部屋、2人部屋と多様で、縦割りの大部屋では高校生が小さい子の世話をしよう期待されており、嫌だということもあった)。

- ・体罰で本当に万引きがなおるのか疑問である（廊下で正座させたり、机に縛り付けたりする、特に男児には厳しい）。
- ・新しい施設長が体罰を禁止し、もし体罰されたら言いにくるように言ってくれているので減った。
- ・長期休暇中の朝マラソンの強制はやめてほしい。
- ・日曜日ごとの作業はやめてほしい。

（各人の提言）

- A・同じ施設内の各ホーム間の格差（担当保母・指導員の裁量によって生活し易さがかなり異なっている）を解消してほしい。
- B・宗教行事は強制でなく、自由参加にしてほしい。登校前の朝食の準備・片付けの強制はやめてほしい。
- C・門限を延ばし、子供を信頼してほしい。
- D・小遣いをあげてほしい。外出可能日数を増やしてほしい。居室にテレビを設置してほしい。親の悪口を言わないでほしい。手紙を開封しないでほしい。
- E・テレビなど時間の使い方を自由にしてほしい。
- F・炊事当番や罰当番を廃止してほしい。

第3分散会（8月9日19：00～20：30）

この分散会では社会的自立（自立への具体的不安・障害・困難，希望と提言）について話し合うことになっている。他の班の動向に影響されて、戸外で行くこととした。環境調査をせずに、夜の海岸に莫塵をひいてスタートしたが、蚊が多くて、話に集中できなかった。加えて、話し合いの前後に花火をしたことと相俟って、彼女らも話し合いに神経を集中することが難しく、1時間半も時間をとりながら発言は低調であった。僅かに以下のことを話し合うことができた。

（進路志望）

- ・6人6色であり、看護婦，美容師，服飾デザイナー，栄養士，OL，未定，であった。栄養士志望のものは施設の奨学金で短大に進むとのことで

あり、その奨学金について説明してもらったが、他の者の羨望の的であった。

(不安・困難)

- ・先輩で就職に失敗した人が多いが、皆対人関係で旨いかなかった。
- ・施設にいる間友人と付き合う経験が乏しいので、そうなる。門限や他の生活上の拘束を考えると、施設の生活は外部の人々との対人関係の機会を奪っている。
- ・高校の成績と友人関係を結び付け、自由に交際ができない。
- ・自立の準備としてまともにアルバイトをやらしてほしい。
- ・自立準備として施設内の自立援助寮みたいところで3日ないし2週間生活訓練させられるが、本当に役立っているのだろうか。
- ・職員は本当に子供が就職してから自立できるようにと努力しているのか。施設にいる時に人と付き合う機会を与えないで、出てから旨くやりなさいというのはおかしい。特に、友人との付き合いが他の高校生と同じ様にできるよう配慮してほしい。
- ・就職支度金に格差があるのはどうしてだろうか（3万円、5万円、15万円、そして衣服や家財道具の購入が含まれるのか別途支給されるのか、各施設でまちまちである）。

第4分散会（8月10日9:30~11:30）

話し合ってきた課題についての討議とまとめを行うはずが、最初からだいたい方向がずれて、この交流会についての意見が続出した。

- ・交流会というのにこの分散会の5人のほかは誰も交流できない。
- ・せめてこの宿舎（民宿）単位でも多くの高校生と知り合いかった。
- ・全員が一堂に集まって自己紹介する機会があると思って準備していたのに気がぬけた。せめて交流会に参加した高校生であるかどうか判る程度の交流がほしかった。道を歩いていて出会っても判らない。
- ・楽しいはずの食事の時間がお通夜だった。
- ・泳ぐ人とは別のプログラム（ゲームやフォークダンス等）が必要ではない

か。

- ・海で泳ぐ回数が当初手渡された日程にあるものより少なかった。
- ・暇な時間が多かった。

(まとめ)

まとめとして、以下のような意見がでた。残念ながら、分散会における話し合い全体のまとめからはほど遠かったが、彼女らの自分の施設・職員にたいする姿勢がうかがえる発言であったことが、ささやかな取り柄であった。

- ・あそこの施設(自分が入所している)には何をいってもしようがない。むこう(その施設の職員)は私達の言い分を聴いてくれない。
- ・保母さんに何かいっても絶対に施設長には伝わらない。
- ・職員のいうことにはプレッシャーをかけられる。口先ではいいことをいうが、実際はずるくて、私達をいいくるめるだけである。特に、「家に帰れ」とか「あなたたちは他の子供より幸せだと思いなさい」等といわれると会話ができなくなる。
- ・交流会にいけば自分の施設がいかに住み良いところか判るといわれたが、実際はもっと住み良い施設が沢山あることがわかった。
- ・高校生が中心となっていていろいろなことを決めて、施設長と話し合い変えてもらうことが大切であり、そのためには高校生が纏まって、高校生部会⁰⁹のようなものを持たねばならない。
- ・無駄かもしれないが、施設に戻ったら、交流会で聞いた他の施設のいいところを必ず職員に伝えてみる。そしてその結果をアシスタントに報告する⁰⁹。

3. 全国養護施設高校生交流会における高校生の意見表明

前章で詳細に記録しているような全国養護施設高校生交流会の分散会は、養護施設で生活する高校生の生の声を最も直接的に聴ける機会である。分散会を行うために参加者は小集団(班)に分けられ、活発に発言できるようになっている。第1回は5班、第2回は13班、第3回は22班で分散会を行った。本章で

我国における「養護児童の声」運動の可能性

は、第1, 2回の報告書に記録された分散会における高校生の意見と彼等の交流会参加の感想を中心に、第3回における筆者の印象を加え、これまでの高校生交流会における意見表明の概要をまとめて、英国の「養護児童の声」活動およびそこにおいて提示された諸問題との比較を行う素材を整理しておきたい。そのためにまず、刊行されている第1, 2回の報告書に記録された分散会における高校生の意見（特に施設生活に関して改善の余地のある諸問題への言及の頻度）を整理してみると、以下の表1のようになる。

表1 養護施設高校生交流会分散会で参加者が言及した施設生活において改善すべき諸問題と言及頻度

（出典：鳥取県児童家庭課『第1回養護施設の高校生交流会鳥取大会報告書』1988年、全国児童養護施設高校生会議設立準備会編『第2回全国児童養護施設高校生交流会・美深大会報告書』1989年）

I 対人関係

(1) 職員と児童

・児童の側に立たぬ（職員への不信）	5	CDEFHIKM
・職員の御都合主義		BDFHJM
・職員のやつあたり	4	ADHM
・職員の暴力・体罰		DEHL
・親身に話を聞かぬ		FHIL
・守秘義務を守らぬ		IJK
・職員の入替り頻繁	5	EI
・旧態依然の意識	3	IL
・男女差別	4	K
・真剣に叱って欲しい		A
・見て見ぬふり		D
・職員は働いているのか		I

(2) 児童同士

・児童間いじめ・暴力	4	BD
・TVチャンネル権	4	
・同室者選択不自由	4	

(3) 職員同士

・職員間意思疎通欠如	4	EHKM
------------	---	------

II 日常生活管理

(1) 日課・規則強制	2345	ADEGIJKLM
-------------	------	-----------

	束縛感強い、被監視感 グループホームの自由さ		(DI)
(2)	厳格な門限（5時—自由） 年齢による多様性必要 友人との交際出来ぬ	2345	DFGHILM
(3)	小遣い不足（施設毎の違い） 1000, 2600, 3000, 4150, 5000, 6000, 8000, （自分で管理したい）	345	BGHKLM E
(4)	プライバシーの欠如 机の中調べ、手紙開封、電話傍聴	2	ACFHIJLM
(5)	テレビ視聴 職員による時間・内容管理	245	EFGHLM
(6)	外出・外泊不自由 許可理由制限、警報機設置	345	AEFK
(7)	交際（友人・異性）不自由 個室なし、異性からの電話傍聴	235	FKM
(8)	居室の格差 個室—8畳6人、低年齢児との同居		BDEHKL
(9)	行事・礼拝・作業への参加強制	245	ADE
(10)	衣服の制限・衣服費は別途支給に お古ばかり、着たいものの着れぬ	25	IJK
(11)	アルバイト禁止		ACEKM
(12)	買物領収証は嫌	4	KL
(13)	食事時間不自由	4	E
(14)	自由時間欠如	2	
(15)	バイク通学禁止（学校は許可）	2	
(16)	連帯責任を負わされる（万引き責任）		B
(17)	髪型のチェック		D
(18)	ペットを飼いたい		E
(19)	一人になれる時間・空間が欲しい		I
(20)	家庭生活に近づけて欲しい		M
III 烙印・差別			
(1)	施設児であることへの烙印 特別視される	145	CKLM
(2)	施設のことをしつこく尋ねる	235	L
(3)	学校・教師による差別	24	
(4)	施設職員が施設児と家庭児区別		AM

我国における「養護児童の声」運動の可能性

(5) 友人を施設へ連れてこれない	2	
IV 自立（退所）準備		
(1) 生活技能への不安 食事、法的手続、新聞申込み 全面的援助からの離脱	235	ADEFHIJM
(2) 独居生活への不安	235	ADIJLM
(3) 金銭的援助希望（経済的不安） 卒業支度金（東京17万）公費3万 施設の奨学金・貸付金	35	ABEIKL
(4) アルバイトしておきたい 金銭感覚に慣れる	5	BCDEKM
(5) 対人関係への不安		CEGJL
(6) 孤独感（頼れる人物の不在）	5	EM
(7) 一般常識・社会性を身に付けたい		ACM
(8) アフターケア保障・充実		BJK
(9) 高校進学保障		BDL
(10) 希望する職種に就けるか不安		HLM
(11) 施設から大学通学出来ぬか		FJ
(12) 運転免許を取らせてほしい		AF
(13) 同一性（アイデンティティ）の確定 自分の入所理由など		C
(14) 施設出身者への差別	3	
V 交流会へ参加して		
(1) 他施設との比較可能	5	EF
(2) 改善努力へ意欲沸く	5	E
(3) 養護施設高校生同士の同一性実感	5	
(4) 対職員関係の重要性認識	5	
(5) 施設ではできない話ができる	5	
(6) 都道県区単位で交流会を		C
(7) 交流会OB・OG会を		C
<u>（各項目の右側にある番号（1～5）およびアルファベット（A～M）は、それぞれ第1, 2回の交流会で当該項目について高校生が言及した分散会を示す。）</u>		

表1からうかがえるように、高校生の発言は施設生活の問題の所在を余すところなく抉り出している。個々の具体的不満や改善要望等は枚挙に暇のないくらい施設生活の多くの側面にわたっているが、全てに共通する問題は、職員が子

供を、子供が職員を信頼しておらず、相互不信の上に施設生活の基盤が築かれていることである。不信は規制（コントロール）の大義名分となる。しかも、規制は職員にとってより楽な処遇上の選択肢となる。規制はまた他の規制を生み出す。かくして、規制でがんじがらめになった生活環境が当然の在り方となって子供に押し付けられる。そして、「施設の子だから、あれもこれも我慢して守らなければならない」という全く子供にとっては不合理な論理がまかりとおる世界が出来上がってしまう。そのような体制に抵抗する子供は、正常な発達過程を踏みつつあるにもかかわらず、突然措置変更されることになる。このように、子供、特に思春期の中・高生にとって最も重要な発達課題に対処する機会をほとんど与えない生活環境が、社会的自立の準備となりうるはずがない。高校生の不満で最も切実であったのは、高校の友人とまともに付き合う機会が、門限や低額の小遣いあるいは執拗な詮索で、實際上許されていないということであった。違う育ち方をした、異なった意思決定をする人格に触れることなく、自立は芽吹かない。高校の他の友人達が楽しげに何かを計画している時に、それに参加できない、それに誘ってもらえない、誘われても断らねばならない彼等の淋しさ、悔しさを職員は判ろうとしない。そういうことを保障せずに、施設は何を彼等に提供しているつもりなのであろうか。施設外の対人関係の機会を保障せずに無菌室で培養された人間が、社会で自立できないのは至極当然である。要するに、それは、職員、子供、規則、自立をめぐる悪循環である。すなわち、職員の子供に対する不信が、子供に必要な生活経験（特に対人関係）を提供しない規則だらけの生活に安住させ、自立に必要な葛藤・意思決定を伴う生活から疎外し、その結果当然社会的自立に失敗する、が、それを自分の誤った処遇の結果だと考えずに子供自身に原因があるとする。現状はこうしたことの繰返ではなからうか。枚数の関係で他の多くの問題にはいちいち触れられないが、このように参加した高校生たちの発言には、実際に苦悩を担うものだけが発することのできる呻きとそうした苦悩から解放されたいという切実な願いが込められている。そして、ここに提示されている諸問題の大多数は、施設で生きねばならぬ児童に「健全で文化的」な生活を保障するためには絶対に避けて通れぬものであろう。

4. 参加した高校生および職員の交流会に対する評価

全国養護施設高校生交流会に参加した高校生が、交流会への参加体験を自らどのように評価しているか検討することによっても、この種の活動の意義が浮かび上がるであろう。高校生には交流会終了後事務局に感想文をよせてもらっているので、以下に紹介しておく。まず、参加が彼等の視野を広げ、他の施設についての知識を得ると共に、同じ境遇にある仲間との話し合いを通じて心の通う友情を結び、施設では言えなかったことを語り合えたということが報告されている。（以下は第1、2回大会への感想）

「他の施設の話聞くことは大変勉強になりました。」

「普段他の施設をしらなかった自分にとって、どこの施設でも同じだということやもっと厳しい施設があるということを知れたことは、プラスでした。」

「施設に対する不満でびっくりしたのは門限が5時というところがあったということです。そんなに早いと学校に行って帰るだけなので友達と遊べず楽しいことがあるのかなと思いました。高校生になると友達付き合いも大切だと思うし、社会に出てから困るんじゃないかと思います。」

「分散会では全員が本音で話し合うことができ、また私も、今まで考えていたことを全部言うことができたのでよかったと思います。なんだかスッキリした気分でした。」

「皆のおかれている立場はほぼ同じ様な感じなので、すごく中味のある話し合いができました。こんなに話がすすむとは思ってもいなかったし、学校の友達とは、こんな話はできないだろうなって思いました。」

「本当に勉強になった。他の施設のよいところを見習いたい。そして私達の学園をよい学園にしたい。それにたくさんの友達ができたし、思い出もできた。この事を帰って学園の皆に知らせたいね。」

「今日で皆とお別れかと思うととてもつらくなり、このまま時間が止まればいいのって思っていました。」

「夏休みの中で一番いい経験をしました。この先あるかないかの貴重な経験

でした……たくさん話し合いました。それが施設改善に向けてのものだと知って、私は施設を誇りに思いました。施設を馬鹿にする人に『ザマーミロ』といいたくなりました。」

「交流会に参加できて本当によかったと思う。なぜなら学園じゃ口に出れないことや体験できないことをおもいっきりできたからだ。」

「他の施設の話聞いて思ったことは、自分の施設は他の施設に比べて自由だと言われてきたが、それは本当なのだろうかということでした。」

「北海道にきて、友達の良さを知り、他の学園は、いい生活をしているなど思いました。」

「ほとんど園に対して不満がない人もいてうらやましかったです。」

「ここだけではなく、この素晴らしい会を全国に知ってもらい、そして認めてもらった時に、OBとして、遊びにも行きたいと思います。」

「人前で話すという経験ができたし、色々な県から高校生が集まって、施設の在り方などの話をするなんていう普通の高校生ではできないようなことも体験した。恐らく一生この事は忘れないと思う…施設が日本中にある以上、やはり施設を中心になるのは高校生だとおもうんで、年に一度は全国の高校生が何か所に集まって話をするのは素晴らしいことだ。」

「まだ全国540の全ての施設が参加していないので、これから本当の養護施設交流会にしてほしい。個々の施設の主催でなく、厚生省などに公に主催してほしい。」

職員と児童の信頼関係と施設の在り方については、次のような感想が寄せられている。

「もっと職員との話し合いの場があれば、職員は子供たちのことを、子供達は職員のことを、もっともっと理解し合えるようになり、よりよい施設での生活が送れるだろうと思いました。」

「大人が子供を信用しなければ子供も大人を信用しません。大人が子供を信用していないから規則が厳しいのではないのでしょうか。」

「分散会では、保母さんに対する不満が特に共通することでした。」

「自分の思っていること、職員に言ってもわかってもらえないことなど、私

自身かなり多くのことを発言したと思います……たくさんの規則に縛られていて、自由といえるほどのものはないといっても過言ではないのです。」

世間の人々の養護施設にたいする誤解・無理解・偏見を矯してほしいという高校生の訴えは、第3回大会の全体会で高校生が最も強く訴えたことであった。第2回大会の報告書には、施設児童であるがゆえにアルバイトを拒否され、あからさまに差別され人権侵害されたある男子高校生の訴えが寄せられている。彼は次のように施設について社会を啓発する努力がなされるよう強く訴えている。

「世間は余りにも施設はどういうところかしらなすぎだと思います。施設はこういうところだ！ というように、新聞に掲載するとか、一冊の本にまとめて市販するとか、とにかく世間の人達に施設はどういうところか、わかってほしいと思います。」

感想を寄せた多くの高校生たちが、交流会での経験を生かして、自分の施設そして全国の養護施設を住み良いものとするために自分たちが主体的に施設生活の改善を目指して発言し、関わっていく決意をしている。

「確かに自分で嫌なところははっきり園長なり、指導員に言うことも大切だとこの会ではっきり自分に判った。」

「これから施設をよいものにしていくには、子供達が積極的に心に思っていることを口に出したらいいと思う。」

「私の施設は、昔に比べると変わってきています。話そう会で私達が言い合って、大人にわかってもらおうとしているから変わってきているのだと思います。」

「みんなの意見を聞いて、私はその施設を変えていくのは高校生だと思う。」

「私は頑張ってみようと思います。そして、自分たちで自分たちの住む家を住みごちのいい家にしようとおもいます。」

「今までは施設なんて退園すれば関係ないのだから退園するまでのガマンだとか考えていませんでしたが、この会に参加してみて、やはりこのままではいけないと思いました。」

「去年話し合ったことを施設に帰って高校生で話し合っって変えていく努力を

したと思う。私の施設、今まで禁止してきた事等が、よいことになっているので変わってきたと思う。」

「思っているだけではいけないんです。やはり、口に出して訴えたり、行動に移すことが大切なことです。」

「この会での収穫は、高校生同士が集まって共に楽しんだことと、これから施設を自分たちの手で、よりよい、住みよい環境にしていくことだと思います。」

「たくさんの友達ができたし、たくさんの人の意見に触れることはとてもいいことだと思う。そしてその意見が学園を変えていくのだと思う。」

「施設を変えるのは高校生だという割りには、弱気な発言が多い。本当に施設を変えるのは高校生だけではなく高校生を中心にして子供全員一人一人が強い意見をもって変えていかなければいけないと思う。」

他方、交流会にアシスタントとして参加した施設職員の側も、施設においては聴けない高校生たちの生の声をきいて、かなり衝撃を受けると同時に施設改善の方策を提示する高校生の意見表明の重さを認識するようになってきている。以下に職員の感想の代表的なものを若干紹介する。

「高校生の発言がまだまだ不満だらけで正当な要求になっていなくても、これが彼等のぶち当たっている現実であれば、施設職員として、私達はもっと大胆に、改善への道を考えていかねばならないと思う。」

「近い将来、高校生からの現状変革の提言に耳を傾けざるをえないだろうし、施設はそうした高校生からの建設的、積極的発言を必要としている。」

『感謝はしているけど信用していない』口うるさく『もっと自分たちを信用して欲しい』という言葉を目にし、大変なことだと思った。家庭の替わりとしての施設での生活がこの程度のものであったとすれば、その人は大変不幸だとしか考えられないのである。」

「初日はシラけていた高校生が、帰る時、『何かわからんけど、このままであってはいけんと思った。』といってくれた時、この会の意義はあったと確認した。」（以上、鳥取大会）

「高校生との会話から感じ取った施設の危険性は、大人たちだけの御都合主

義で施設が運営されていないか、子供達個々が潜在的に持つパワー及び自主性が殺されてはいないか、さらに、児童福祉において安易に考えられている常識が、主体者である児童を除外したところで一人歩きしている、ということである。」

「施設の不合理な問題に対する討議が、施設で生活する高校生自身によってなされることは重要だし、やはり発言に説得力がある。子供たちの真剣なまなざしと屈託のない表情に私自身大いに励まされ考えさせられた。」

「今の何とか保っている平穩(?)な生活に固着したいがゆえに、職員が指導しやすい管理生活を強いてはいないだろうか……彼等は多くの児童の代弁者であり、その意見に聴く耳を傾けた時、初めて『互いに育ち合う養護』になり、彼等の人格を尊重していく事になるのではないか。」

「彼等の言葉に重みを付け、市民権を与える援助が必要である。」

「今回の交流会では、私が施設に勤務してから常々気になっていたことが、実際に高校生の生の声となって出てきました。」

「施設職員ということで本音を吐露してくれたとは思えないが、施設職員だからこそ、かなり率直な感想・意見を出してくれた部分もあるように思えた。」
(以上、美深大会)

「……児童の声に、児童福祉に携わる人間の一人として襟を正される思いがした……私達職員は、児童の保護者として、また彼等の将来を思い児童の代弁者として養護児童の実態を伝え、広く社会に理解を求めていく責任がある。児童からも養護施設に生活することの引け目や偏見を取り除いてほしいとの切実な訴えがある。私達は、彼等の声に心して耳を傾けなければならないと思う。」

「……ナマの声の迫力は私の細胞の隅々まで浸透するかのようだった。特に、施設長という立場にある私は、ある時は針のムシロに座らされている思いがしたが、彼女らが厳しい施設批判を展開する傍らで、同じ施設へのいとおしみを吐露するのを聴いて救われた……家庭(人)に恵まれなかった子供がやむなく入った施設という場においても信頼できる人に恵まれなかった、と訴えるのを聴いて身の置き場に困った。子供が大人をみる目は鋭く、厳しい。それに応える人間性と専門性こそ求められているのだが……。子供の信頼に足る大人

になっているか、子供に受け入れられる大人になる努力をしているのか、自問せざるを得なかった。」

「施設側は、高校生の存在そのものをまずは受け入れ、立場の優位性に胡座をかかず、彼等の自律心の育成に努めてみてはどうか。高校生の側も、諦めと不信の中に安住しては仕方がない…彼等には、明らかに現状変革のエネルギーとその可能性が潜在している。交流会で出会った高校生の中には、既に有為で、施設での中心的役割を果たしている頼もしい若者が数多く見られた。」

(以上、京都大会⁰⁹)

5. 今後の課題——日英の比較から

表2に見る通り、全国養護施設高校生交流会と英国の「養護児童の声」活動は、あらゆる次元で様相を異にしており、一方は施設（職員）内からの改善運動の一種であり、他は養護サービス利用当事者である児童自身による改善運動である。しかし、両者に共通するのは、「養護児童の声」を児童養護改善のための現状認識とサービス評価に不可欠な意見表明と位置付け、「声」を組織的に開示しようとする視点である。英国では、ソーシャルワーク発達の仕方のゆえに施設（職員）内からの改善運動は夢想だにできず、他方、我国では養護児童（養護経験者を含む）自身がサービス利用者としての権利擁護運動の一環としてこうした活動を組織するという発想ができるほど、社会福祉の理念と現実が成熟していない。これ程の差異を越えて、同じ視点が要請されていることは、その視点の普遍性の証明の一つであるといえるかもしれない。本稿の冒頭に掲げた3つの文章は、その視点を論理づける証言・根拠である。一つは、交流会参加児童のアシスタントへの語り掛け、次は英国新児童法（1989年）の中心理念の専門家による解説、最後は国連こどもの権利条約第12条である。いずれも、これまでの児童福祉（もちろん児童をめぐる社会政策全般にわたり）を牛耳り、君臨してきた家父長的父権的神話——「我々大人はこどもに最善のことをちゃんと知っている（から彼等に最善になるように政治・行政・実践を行う）」の欺瞞性を暴くと共に、真の意味において児童人権擁護を社会制度において実

我国における「養護児童の声」運動の可能性

表2 英日「養護児童の声」運動の比較

	英 国	日 本
主 催 者・団 体	全国児童研究所（1975年会議のみ） 全国養護児童協会（NAYPIC）	養育研究会（1988年） 全国養護施設高校生会議準備会（1989年） 全国養護施設協議会（1990年）
参 加 者	12～20歳の施設児童・里子・養護経験者 （NAYPIC 支援ボランティアとしての市民・ソーシャルワーカー・法律家・教員）	15～18歳の施設で生活する高校・専門学校生 （アシスタント：施設長・指導員・保母・児童福祉司・民間福祉機関職員・大学教員）
目 的	サービス評価・施策実務改善	交流と連帯感の培養・主体性の確立
活 動 内 容	意見表明・討論を通して施策実務改善案を明確化する—中央・地方政府委員会，専門職団体，教育研修団体，職員研修会において意見具申・勧告を行う（レクリエーションも伴う）	分散会・全体会での討論で施設生活に関わる諸問題を明確化するとともに，各施設の高校生と交流できるレクリエーションを行う
活 動 頻 度	年次総会・地方支部定例会，施策実務が変化しそうになると随時	年に1回
活動計画立案者	児童の代表と NAYPIC 職員（養護経験者）	施設長・指導員等の実行委員（児童含まず）
社会的認知度	養護児童権利擁護運動の一環として社会的に確立し，関係者から認知されている	高齢児養護処遇の一環としての養護施設高校生の主体性確立運動の試行段階
活 動 の 性 格	利用者の自助活動	施設内からの処遇改革努力
活動財源・支援	保健省（NAYPIC 専任職員雇用・事務所の経費負担）地方自治体社会福祉部長会の事務所・事務労力支援	参加費が主要財源 新聞社寄付など
そ の 他	NAYPIC から IN CARE COMPANY の分離	参加職員の研修効果大きい 参加者からOB会設置希望大
今 後 の 課 題	地方支部増大，財源の確保 エイジコンサーンのような普遍的活動を目指す	増大する参加者と会の在り方の再検討 全養協における評価位置付け確立 アシスタントの研修

現しようとする視点を提供している。ゆえに、英国の「養護児童の声」活動が実績を上げているのと同様に、我国の全国養護施設高校生交流会が計り知れない潜在的可能性を秘めていることは疑い得ない。これまでの3回の実践は、そのことを確かに実証している。しかし、今後より一層の発展をはかるために解決すべき課題が幾つか残っている。まず、全国養護施設協議会⁶⁶における本交流会の評価と位置付けの問題である。63施設が高校生を参加させたとはいえ、その数は施設総数の僅か12%であり、全養協より送った交流会への招待状が職員・こどもに届いていない施設もかなりあると推測される。全養協主催となり、来年以降本年以上に参加希望者が増大すると考えられる。そうすると、これまでのように年に1度1か所に全員が集まって開催することには非常な困難が伴うこととなる。幾つかの地方に分けて実施するか、年に複数回各地で行う、というようなことが要請されるようになるかもしれない。それに加えて、交流会の主旨を徹底しつつ、参加希望職員への導入として事前事後研修会を実施する必要が生じるであろう。また、交流会参加児童の事後組織（OB・OG会）についても何等かの考慮が必要になろう。いずれにしろ、これまでの方式を踏襲するだけでは既に対応できなくなりつつあることは確かである。最後に確認して、強調しておきたいことは、全国養護施設高校生交流会という運動は、我国における「養護児童の声」活動の一つの選択肢に過ぎないということである。「養護施設のあるべき姿を追究する好機といえ……ともすれば、管理主義・職員の都合主義に陥りがちな施設の様態に対して具体的な提言をしてくれる事業⁶⁷」と評価されるがゆえに、現状では、この交流会の活動の充実発展に関係者・関係団体が全力を注ぐべきことはいうまでもないが、これ以外にも、「養護児童の声」活動の実質を体現できる日本のモデルが構想される可能性についても真剣な探求が要請されるであろう。

註

- (1) 全国養護施設高校生交流会第3回京都大会における高校生の発言、全国養護施設協議会『全国養護施設高校生交流会・京都大会・報告書』1990年10月25日刊、p. 67（この報告書、参加児童の『感想文集』および京都大会を記録し40分に編集したビデオは、全養協か平安養育院一京都市東山区林下442-075/561/0680で購入できる）

- (2) Smith, M. P. (1989) *The Children Act 1989*, National Children's Bureau, Research Highlight No. 91.
- (3) Article 12 of *U.N. Convention on the Rights of the Child*, 国連こども権利条約の第12条, 国際教育法研究会訳・編集『こどもの権利条約』, 子どもの人権連, 1989年, p. 20.
- (4) National Children's Bureau (1977) *Who Cares? - Young People in Care Speak Out*, 拙訳, 英国児童福祉研究会, 1982年.
- (5) National Association of Young People In Care (1983) *Evidence to the Parliamentary Select Committee on 'Children in Care'*, 拙訳, 英国児童福祉研究会, 1983年.
- (6) 以下の拙稿を参照せよ。「英国児童養護における利用者のサービス評価活動の展開と意義」四条畷学園女子短期大学研究論集第16号, 1982年, 「海外の児童養護—養護児童の声」『季刊児童養護』第14巻1号, 1983年, 「英国の児童がまとめた養護問題検討会報告書」『世界の児童と母性』第18号, 資生堂社会福祉事業団, 1985年, 拙訳「養護児童の声を聴く—カナダにおける『養護児童の声』活動への接近」大阪市立大学社会福祉研究会紀要第5号, 1986年 'Listening to Children-Who Cares?' by Kathleen Kufeldt, *British Journal of Social Work* (June 1984) No. 14, BASW, 「養護児童の声を聴く—座談会から学ぶこと」『養護施設の40年—原点と方向をさぐる』全国養護施設協議会, 1986年, 「英国児童養護における当事者組織—『養護児童の声』と全国養護児童協会」『ソーシャルワーク研究』Vol. 12, No. 4, 第47号, ソーシャルワーク研究所, 相川書房, 拙編訳 (1990) '*The 2nd Report of a Japanese Who Cares? Meeting*' The Provisional Group for Organising National Conference of Young People in Care in Japan.
- (7) 木下茂幸「養護施設の高校生交流会」『月刊福祉』第72巻5, 1989年, p. 72. なお木下氏と共に, 交流会の中核を担ってきた藤野興一氏は, 交流会発足の契機を次のように説明している。「…高年齢処遇, 高校生処遇の問題というのが現在の養護施設界にとって重要な問題です。我々が子供たちの社会的自立ということを考えるときに, これは避けて通ることのできない大きな問題であり, 今では大学進学問題まで含めて大きな問題であると思っています。そういう意味で, まず我々としては高校生の声を聴きたい。我々職員がこういう形で研修会をもちますが, 高校生自身, 例えば生まれてからずっと施設で育っている。施設しか頼るところがないという子供達が自分の施設をどのようにみているのか。どういう願いをもっているのか。どういう叫びをもっているのか, ということをぜひ, 一つ社会的な声にまですべきだと思ったのです。」藤野興一「全国養護施設高校生交流会の取り組みから自立を考える」『季刊児童養護』第20巻3号, 1990年, p. 29.
- (8) 鳥取県児童家庭課『第1回養護施設の高校生交流会—鳥取大会報告書』1988年, pp. 6~10.

- (9) 全国養護施設高校生会議準備会『第2回全国養護施設高校生交流会・美深大会・報告書』1989年, pp. 7~11.
- (10) 藤野興一氏の言及『全国養護施設高校生交流会・京都大会・報告書』1990年, p. 9.
なお, 市川太郎氏による交流会の評価については, 同氏稿「第1回養護施設の高校生交流会鳥取大会」『季刊児童養護』19巻, 全養協, 1989年および「全国養護施設高校生交流会の活動と今後の展望についての私見」『児童福祉研究』19号, 東社協児童部会, 1990年, を参照せよ。
- (11) 同上書, p. 16.
- (12) 第14班のメンバーである一人の高校生の施設の責任者は, 筆者が20年前ボランティア活動を行っていた九州の養護施設の職員であった方であることが判明した。
- (13) 養護施設における高校生部会とは, 施設で生活する高校生が主体的に施設での生活に関与するよう組織化された施設運営のサブシステムであり, これは全国養護施設高校生交流会の発足に中心的役割を果たした木下氏の発想に基づき, 各地の若干の養護施設が採用し始めた方式である。参考までに『季刊児童養護』編集部が取材した美深育成園の高校生部会の記事の一部を紹介する。『「高校生部会は昭和60年度に発足した…発足の経緯であるが, それは昭和59年において, 今後高校進学を積極的に進めるという方針を決定したことによる…思春期児童の不満の多くは, この大人たちの御都合主義に不信感をもち集中している。この状況を解決するのが高校生部会発足の大きな意向であった。すなわち高校生部会の発足によって, 高校生のポジション(地位・位置付け)の向上を計ったのである。』(昭和62年度事業計画より)として, 部会を(1) 社会人となるための訓練の場(自治会ではない)(2) 育成園の事業の協力者(したがって予算措置もある)と位置付けている。また『……部会役員は園長の任命制であり, 部会報告・部会活動計画も園長の承認が必要である……』(前掲書)とあるように, 高校生部会は木下園長の直轄領域であり, ホームからはいわば治外法権を認められている。であるから高校生部会を開くかぎりにおいては, 彼等はホームから時間的制約を受けることはない……園行事の全てが彼等によって立案・実施され, ホームの職員は彼等の要請によって協力することになるという, 彼等自身がワープロで作成した30ページに及ぶ『美深育成園高校生部会活動報告書』がその内容の濃さを雄弁に物語っている。社会人になるためのトレーニングとしての組織活動, したがって園長の指揮下にあるとはいえ, 彼等の姿勢から, 任されている者のもつ責任感というものを強く感じさせられた。』『季刊児童養護』編集部『季刊児童養護』第21巻1, 1990年, p. 40.
- (14) ちなみに一人のメンバーからの報告では, 施設に帰って交流会のことを報告し, 「どこどこはこんなにいいよ」と職員に伝えても, 「やっぱり施設ごとにやり方があからな」と反論され, むしろ「この施設のここといいように伝えてきたか?」ということの方が職員の関心であり, 残念であった, ということである。
- (15) 全国養護施設協議会『全国養護施設高校生交流会・京都大会・報告書』1990年,

pp. 65～70.

- (16) この問題は京都大会担当地元責任者が、(1) 初回から関係された先駆者の熱い主張が、全養体制のどこで論じられたか、(2) 全養協協議委員会での「協議事項」として不十分、(3) 企画主体者が曖昧、主催者とその責任の所在が曖昧、の3点において指摘している。同上報告書, p. 7.
- (17) 北元瑛性, 同上書, p. 7.

